

ラニーニャ現象の発生期間とラニーニャ現象発生時に現れやすい天候の特徴

1. ラニーニャ現象の発生期間について

記録のある 1949 年以降、ラニーニャ現象は 13 回発生しています。このうち、今回のようにエルニーニョ現象が終息してすぐ、次の季節に発生したものは約半数（6 回）となっています。

発生間隔は 2 年から 10 年に一度（平均 5 年程度）で、平均継続期間は 5 季節となっています。

（今回のラニーニャ現象を含まずに計算）

表 1 ラニーニャ現象の発生期間と継続期間(季節単位)

発生期間		継続期間 (季節数)
1949 年夏	～ 1950 年夏	5
1954 年春	～ 1955/56 年冬	8
1964 年春	～ 1964/65 年冬	4
1967 年秋	～ 1968 年春	3
1970 年春	～ 1971/72 年冬	8
1973 年夏	～ 1974 年春	4
1975 年春	～ 1976 年春	5
1984 年夏	～ 1985 年秋	6
1988 年春	～ 1989 年春	5
1995 年夏	～ 1995/96 年冬	3
1998 年夏	～ 2000 年春	8
2005 年秋	～ 2006 年春	3
2007 年春	～ 2008 年春	5

2. ラニーニャ現象発生時に現れやすい天候の特徴

ラニーニャ現象発生時の秋と冬に現れやすい日本及び世界の天候の特徴は、以下の通りです（1979 年～2008 年の 30 年間のデータをもとにした統計調査による）。

なお、今後の天候の見通しについては、最新の季節予報を参照してください。

①日本の秋（9月～11月）と冬（12月～2月）の天候（図1）

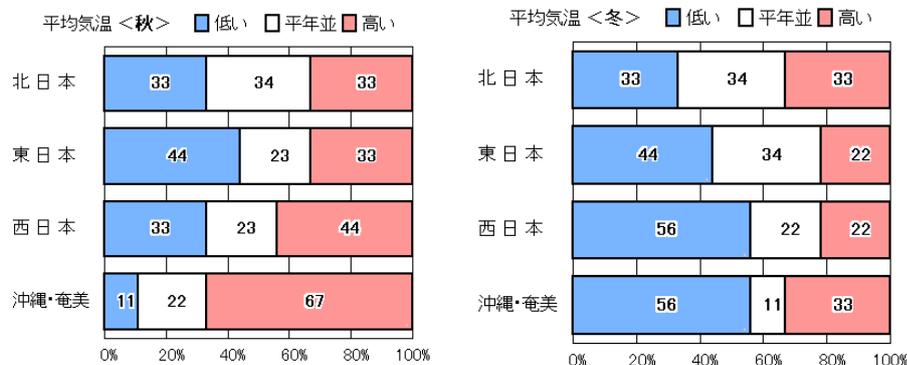
（<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/elnino/learning/tenkou/nihon2.html>）

秋： 気温は、沖縄・奄美で高い傾向があります。

降水量は、北日本太平洋側、東日本太平洋側、および西日本で少ない傾向があります。

冬： 気温は、東日本、西日本、および沖縄・奄美で低い傾向があります。

降水量は、特に傾向が見られません。



①秋（9月～11月）

①冬（12月～2月）

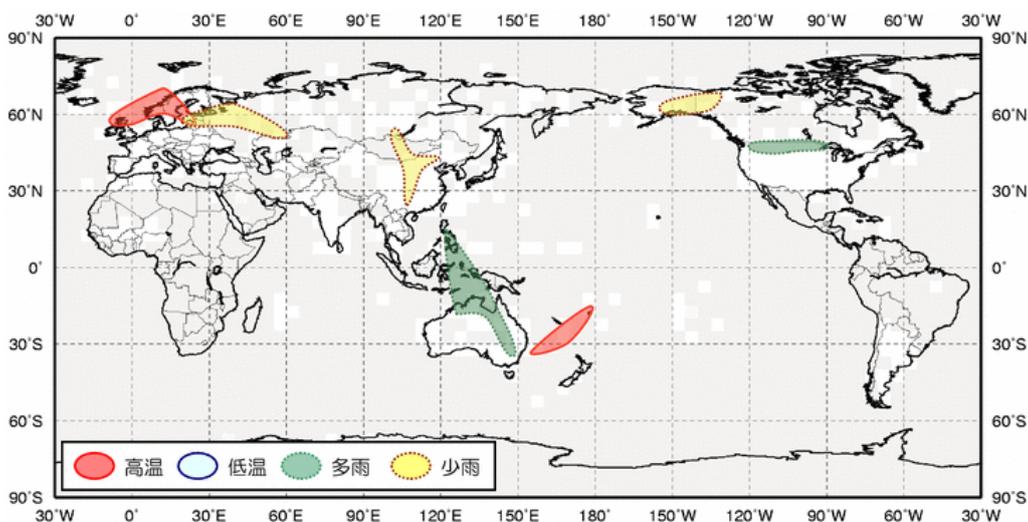
図 1 ラニーニャ現象発生時の気温の特徴

棒グラフ上の数字は出現率を示しています。長期的な変化傾向を除いています。

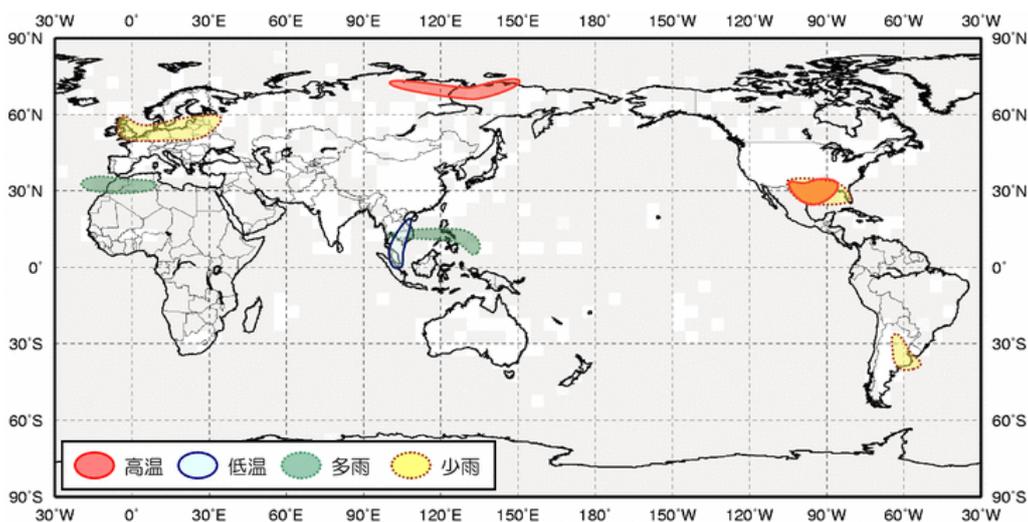
②世界の秋（9月～11月）と冬（12月～2月）の天候（図2）

(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/elnino/learning/tenkou/sekai2.html>)

- 秋： 気温は、ヨーロッパ北西部、メラネシア南部で高温傾向が見られます。
 降水量は、フィリピン～オーストラリア東部、米国北部で多雨傾向が見られます。
 中国中部、ロシア西部、アラスカ周辺で少雨傾向が見られます。
- 冬： 気温は、シベリア北部、米国南部で高温傾向が見られます。インドシナ半島周
 辺で低温傾向が見られます。
 降水量は、フィリピン周辺、アフリカ北西部で多雨傾向が見られます。ヨーロ
 ッパ中部、米国南部、アルゼンチン東部で少雨傾向が見られます。



①北半球の秋（9～11月）



②北半球の冬（12～2月）

図2. ラニーニャ現象発生時の世界の天候の特徴

ラニーニャ現象発生年とエルニーニョ現象・ラニーニャ現象ともに発生していない年とで比較し、検定の結果、危険率 10%未満で有意な差のあった地域をまとめて分布図に示しています。また、灰色は観測データのない領域、薄い灰色は気温もしくは降水量のいずれかの観測データのない領域を表します。気温については長期的な変化傾向を除いています。